「ピンポン外交」の展開と日中関係の行方 (※1)

高普第６回卒　西 郷　徹 夫 (※2)

本棚を整理していたら、数枚のサイン入りの色紙と一緒に古びた大きな封筒が出てきた。それには 1971（昭和 46）年名古屋で開催された第 31 回世界卓球選手権大会の審判員として参加した際にまとめた「手記」と各国選手との交換バッジ十数個、それに当時の世界卓球を報じた関連の新聞が入っていた。今から 37 年前のものである。

当時、記した「手記」を懐かしい思いで読み返しているうちに、あの時の感動シーンが糸をたぐるように次から次と蘇ってきた。その中でも忘れられないことは、当時展開された「米中ピンポン外交」の記事である。

「“友好第一、勝敗第二”の方針を掲げて参加した中国が、アメリカ卓球団を中国に招待すると発表」という記事である。

あれは、世界卓球の団体戦が終わり、次の日が中休みという日、3 月 30 日の出来事であったと鮮明に記憶している。

警護上の理由から、特別に設けられた大会関係者や中国選手団のための駐車場で、中国選手団を乗せたバスにヒッピースタイルのアメリカのグレン・コーワン選手が、自分の乗るべきバスに乗り遅れたためか、この駐車場に迷い込んできた。それを見ていた中国の選手たちがコーワン選手に手招きで「われわれのバスに乗ってもいいよ」というようなジェスチャーをしたり、拍手をしたりして盛んに歓迎する様子とコーワン選手を乗せた中国選手団のバスが通り過ぎていくまでの一部始終を私は隣のバスから見ていたのである。

3 月２0 日に開幕した大会も、4 月 7 日にその幕を閉じた。

私は翌日帰途についた。途中東京駅で購入した新聞にはこの場面が写真入りで大きく報道されており、米チームが北京に招かれたことを知り心が躍った。

その後、4 月 10 日に米チームが北京に到着、その舞台裏ではキッシンジャー米大統領補佐官が周恩来中国首相と会談、ニクソン米大統領訪中の準備が進められ「ピンポン外交」が展開されていったのである。その鮮やかな「ピンポン外交」に世界は衝撃を受けた。

1971（昭和 46）年 2 月、アメリカのニクソン大統領が周恩来中国首相と会談、朝鮮戦争以来 22 年間の敵対関係を解き、上海で相互不可侵、平和共存など「平和五原則」を米中合同コミュニケで発表した。

アメリカは中ソ関係の対立を利用し「ピンポン外交」を展開して米中和解の布石をつくったのである。

当時の日本では日中関係が何んら具体的な進展を見ないうちに、突然アメリカによる「頭越し外交」が実現されたため、当時のマスコミは中国敵視と政経分離を唱えてきた佐藤内閣の外交路線が痛烈な打撃を受けたとも報じられた。

私はその「ピンポン外交」の端緒となった歴史的な場面をその時、その場所に居合わせ目撃したのである。以来、私はその後の米中関係の改善と日中の国交回復にはずっと強い関心を持ち続けてきた。

……　　中略　……

一方、日中関係については1972（昭和47）年9月、北京を舞台に日中国交正常化のための交渉が田中首相と周恩来首相の間で行われ、共同声明に調印し、新たに日中関係の扉が開かれることとなった。その本文には、両国の不正常な状態（戦争状態）は共同声明発表をもって終了することや中国は日本に対する戦争賠償の請求権を放棄するなどの内容が盛りあげられている。

その後の日中関係については、小泉首相の靖国神社参拝問題や教科書をめぐる歴史認識の違いなどで冷え切った日中関係の5年が過ぎた。

最近では、東シナ海ガス田開発問題、中国製冷凍毒入りギョーザ真相究明に関わる問題、国際社会から批判を浴びているチベット人権問題など、日中間における未解決な問題が山積みしている。

こうした中で、国家主席江沢民の訪日以来十年振りに、5月6日に胡錦濤国家主席が来日し、首相官邸で福田・胡錦濤会談が行われた。

……　中略　……

しかしながら、今後の日中関係には解決しなければならない課題も多く、特にギョーザ事件、知的財産の保護など、その具体的な解決策の進展にはまだ程遠い思いがする。共同声明はしょせん出発点に過ぎない。新しい日中協調の現実が試されるのはこれからだろう。

胡主席は早稲田大学での講演で、日本の対中借款が中国の近代化路線を支えたことを高く評価した上で、戦後長年にわたって日中関係に貢献した日本国民の努力を「中国人民は永遠に忘れない」と感謝の気持ちを述べている。講演後は、卓球の福原愛選手とラリーを展開し会場を湧かせた。

胡主席が帰国して間もない5月12日、大規模地震（四川大地震・M８）があり、連日報道されている被災地を覆う悲しみと絶望に言葉もない。被災から１ヶ月経った現在まで、死者7万人以上、行方不明者1万8千人以上、ケガで苦しんでいる人々12万人以上、この災害に怯えながら避難生活を送っている人々810万人以上という。

日本の国際緊急援助隊の懸命な作業にも拘わらず中国政府からの要請が遅れたためか、生存者を救い出すことはできなかった。最初の現場で収容した母子の遺体に整列して黙祷を捧げた姿がTVや新聞で報じられると、中国人の心を揺さぶって賛辞が湧いた。救助隊が戻った成田空港には出迎える中国人留学生らの姿があった。入れ替わりに日本の医療チームが被災地へ向った。救える命を一人でも救うために。

この禍の地から日中間の信頼や友情が芽吹き花咲くことを信じたい。

8月にはいよいよ北京オリンピックが開催される。北京オリンピックの成功を祈るとともにオリンピックを契機に国際社会に溶け込む中国国民の意識が少しでも変革につながることを期待したい。

37年前のあの「ピンポン外交」、せっかく卓球が取り持つ縁でスタートした平和外交が多くの壁を乗り越えて花開くことを念願して止まない。

（記　2008・6・12）　参考資料　朝日新聞

（※１）創立110周年記念誌『紅の旗』〈2009（平成21）年１月発行〉「思い出の記」〈ああ、我らが青春の日々よ〉より。

（※２）昭和29（1954）年卒、中村出身。

（転記&※脚注　村山）